視線の回廊
Corridor of the Gaze

CHAPTER
1

THEATRICAL TABLEAUX

物語とイメージ

1998年4月3日[金]—6月28日[日]
April 3 Fri.—June 28 sun. 1998

主催 東京都写真美術館
Tokyo Metropolitan Museum of Photography

はじめに

本年度常設展では「視線の回廊」を題し、4部構成による展覧会を開催してまいります。第1部となる本展では、写真における物語のイメージを展観し、写真誕生の頃からの歴史を振り返ると同時に、メディアとしての写真表現の特質を考察いたします。

写真術が誕生した19世紀半ばのヨーロッパでは、美術の世界における芸術的地位を獲得しようとしたことから、写真は様式的に絵画を模倣し、絵画の主題に範を得た作品が数多く生み出されました。写真は絵画を凌駕するともいわれた写真史の初期において、写真家たちは眼前の事物を正確に記録すると思われたその特質に着眼しながらも、写真表現の拠り所を多分に絵画の領域に求めたのです。そして写真に多大な影響力を及ぼした西洋絵画が創造力の源泉として求めた主題は、歴史画や神話、聖書や詩のイメージに迫るものでした。

19世紀の写真家たちは、こうした流れのなかで、ヴィクトリア朝の物語絵画やラファエル前派の影響を受け、また絵画と写真の相互的な関わりの中から数多くの作品を生み出しました。また20世紀初頭に「カメラ・ワーク」に掲載されたピクトリアリズムの作品からも、叙情性に溢れた物語的な創造性が窺えます。近年においては、作中に自らのアイデンティティを同化させたセルフポートレイトや、連続するシークエンスの手法等によって、写真が編み出す逸脱的かつ演劇的なイメージを描出させています。

本展は、19世紀から現代に至る本館所蔵による幅広いコレクションを中心に、写真史を築き上げた視線の軌跡を追ろうとするものです。

テアトリカル・タブロー——ヴィクトリア朝の絵画と写真

神保京子

ホラティウスの「詩論」(B. C. 20-19年)のなかで最初に現れた一節——「詩は絵のごとく(Ut pictura poesis!)——は、詩と絵画という二つのメディアのアナロジーを示すものとして、特に中世から18世紀頃にかけて幅広く議論された。少なくとも18世紀中葉までのヨーロッパにおいて、文学と絵画はいわゆる「姉妹芸術」とみなされており、文学は「有声の絵」として作品にいかなる視覚的イメージが描出され得るか、また絵画は「無声の詩」としていかに豊かな文学性が反映され得るかに評価の基準が置かれていたという。今日では本質的に異なる表現形態として考えられている、文学と視覚的芸術としての絵画が、写真術が誕生する一世紀程前のヨーロッパにおいて極めて密接な関係を持つものとして語られてきたという思想的背景は、19世紀から始まる視覚芸術としての写真作品にみられる物語性について考察する上で極めて興味深い。

オスカー・ギュスタヴ・レイランダー(Oscar Gustav Rejlander)によって1857年に発表された寓話的主題による作品、「人生二つの道(The Two Ways of Life)」は、約30枚のネガをもとに合成された意味作であった。古代ローマ風の衣装を身につけた役者たちをモデルに、画面右手に勇敢や節度、左手に怠惰を表現し、イタリア・ルネッサンスの絵画様式を踏襲した作品が、ヴィクトリア女王によって買い上げられ夫アルバート公に贈られたというエピソードは、エポックを創り出す作品としての注目度を示しています。この作品が制作された当時、写真界ではその芸術性を巡って活発な論争が展開されていた。社会改良家であり美術批評家のジョン・ラスキンは、写真の正確な復元性を称賛し、絵画の写実主義を批判した。これに対して詩人のシャルル・ボードレールは、写真が芸術であるという考えに痛烈な批判をあびせ、写真が「実態のない創造の世界や人間の精神に触れる領域に入ることを恐れた。当時のヴィクトリア朝人の潔癖かつ実直な気質に訴える教訓的な説話をもとにしたレイランダーの寓意画は、このような論争の中にあって、写真の芸術における地位を獲得しようとした一つの残映でもあったのだ。

しかし絵画の表現に映し出された思想や理想が写真によっていかに表現され得るかという点に関して、批評家たちの間で懐疑的な傾向が現れはじめた。バーナード・ショウも語ったように、写真は説教的、教訓的なものを描くにはあまりに真実なのであり、カメラは腹立たしい程あらゆるものを写してしまうために、暗示や象徴性には関心をもたないというものである。「人生二つの道」は後に「偉大なる愚作」との評を受け、レイランダーは次第に自信を喪失し、その後の寓意画は都作に留まった。しかし後に影響を受けて合成写真に取り組んだヘンリー・ピーチ・ロビンソンは、こうした批判をよそに寓話的な数々の作品を生み出していった。

1858年にロビンソンによる初めての合成写真として発表された「臨終(Fading Away)」や1885年に制作された「晩と日没(Dawn and Sunset)」は寓意的意図に拠っているが、後に自然な表現を求めた合成写真では、チェスターやスペンサーの詩篇等に触発され、日常的主題や風俗画を描いた。彼は「創造力こそが芸術である」と語り、自ら をラファエル前派の一員と考えていた。批判を受けた合成写真について、「冷笑に対しては、我々は耐えねばならない。一方、ラファエル前派の進展に我々はある程度をともにできる。私の試みが、「その乱基で切りふにょうな輪郭描写」等々をあざけられたのと同様、彼らは生硬さと模倣なデッサンを長年に亘ってだ笑われてきたからである。」*1と語っている。

ジュリア・マーガレット・キャメロンが娘からカメラを贈られたことをきっかけにこの世界に開眼したのは1864年、48歳の時のことである。これ以降約10年の間集中的に制作された作品は約3000点に及び、毎年サロンに出品するなどして貴族な創作活動を展開していった。友人たちの中には写真界に業績のあったジョン・F. W. ハーシェルの他に、詩人のアルフレッド・テニスン、詩

*1——Beaux Arts Bohemes (1860-1900)
ボードレール、ベルナール、ルノワール、ゾラ、ドガ、マネ、ロートレック等、19世紀末パリのボヘミアンたちの交遊録。ピエール・ルイスの「ビルティスの歌」の翻訳者でもある。*2——Mr. Robinson's work, as far as I know, stands alone. Photography is a fertile interpretative art, and Mr. Robinson's delicacy in Camera work, for example, has established his claim to be the most poetic of all the photographers.
Bernard Shaw, Photography and Photographers, 1909 (Bernard Shaw's Photographs, Dover Publications, Inc. New York, 1977, p. 75)

謝辞
本展開催にあたり、下記の方々並びに機関のご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

日本大学芸術学部写真学科
成山画廊
原 直久
高橋朝英
成山明光
クリストファー・カルチンバック

Acknowledgement
In holding this exhibition, we would like to express our sincerest thanks to the following individuals and institutions for their kind cooperation.

Department of Photography College of Art, Nihon University
Gallery Naruyama
Naohisa Hara
Norhide Takahashi
Akimitsu Naruyama
Christopher Kaltenbach

Man Ray
Cine Sketch, Marcel Duchamp & Brogna Perlmutter-Clair As Adam & Eve (After Cranach)
Gelatin silver print
1924
11.5×8.7cm

マン・レイ
シネ・スケッチ：アダムとイヴに扮したマルセル・デュシャンとブローニャ・ペルルムター＝クレール（クラナッハによる）
ゼラチン・シルバー・プリント
1924年
11.5×8.7cm

Hippolyte Bayard
"Le Noyé", Auto-portrait
Gelatin silver print
c.1840 (Printed later)
13.6×12.5cm

「ポリット・バヤール 溺死した男、セルフ・ポートレイト」
ゼラチン・シルバー・プリント
1840年頃（モダン・プリント）
13.6×12.5cm

■開館時間
午前10時～午後6時まで（入館は午後5時まで）
入館は閉館の30分前まで
■休館日
毎週月曜日（休館日が祝日または振替休日の場合はその翌日）
年末年始（12月28日～1月4日）
■観覧料
東京都写真美術館常設展示室・地下1階映像展示室
一般・大学生＝500［400］円　高校生＝250［200］円
企画展
一般・大学生＝600［480］円　小・中・高校生＝300［240］円
兼売：企画展券・通観展券
一般・大学生＝1,000［800］円　高校生＝500［400］円
［ ］内は20名以上の団体料金
●小学生未満、65歳以上の方及び障害をお持ちの方は無料になります
●次に該当する方は常設展（映像と光線展を含む）は無料になります。
小・中・高校生、障害者手帳（または療育手帳）をお持ちの方とその介護者1名

■インターネットアドレス http://www.tokyo-photo-museum.or.jp
●最寄り駅東山手線恵比寿駅下車、恵比寿ガーデンプレイスまで徒歩5分
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel. 03-3280-0031 ハローダイヤル 03-3280-0099

編集：東京都写真美術館
装丁：神保京子（K. J.）、金（陣一郎（K. K.）、中原淳行（A. N.）
制作：美術出版デザインセンター
デザイン：中島デザイン事務所
翻訳：ポワード・ワークス
発行：©財）東京都歴史文化財団、東京都写真美術館 ©1998
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 Tel. 03-3280-0031

Edited by Tokyo Metropolitan Museum of Photography
Text by Kyoko Jimbo, Ryuichi Kameko, Atsuyoki Nakahara
Produced by Bijutsu Shuppan Design Center Co., Ltd.
Design by Nakagaki Design Office
Translated by The Word Works
Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
Tokyo Metropolitan Museum of Photography ©1998
1-13-3 Mita, Meguroku, Tokyo 153-0062, Japan phone: 03-3280-0031

Printed in Japan

William Henry Peach Robinson

Julia Margaret Cameron

Study of a Young Girl
ジョゼフ・ベヴィントン
1860-70年　34.2×26.6cm

ジュリア・マーガレット・キャメロン
少女習作
1860-70年　34.2×26.6cm

Hippolyte Bayard

Le Noyé, Auto-portrait
Albumen print
1860-70 21.0×17.8cm

ヒポリット・バヤール
溺死した男、セルフ・ポートレイト
albumen print
1860-70　21.0×17.8cm

Clarence Hudson White

クラレンス・ハドソン・ホワイト
Clarence Hudson White (1871-1925)
通俗的なロマンスを数多く描いたことで知られるアメリカの小説家アーヴィング・ブディンソン・バチェラーが1900年に著した物語「エバン・ホールデン」のためにホワイトが撮り下ろした写真の1枚である。シャープな長焦点レンズで切り取られた空間は、あたかも舞台の一場面を思わせるパースペクティヴの効果に彩られている。(K. K.)

「エバン・ホールデン」のための挿絵
「カメラ・ワーク」9号（1905年）より
フォトグラビュール
19.6×13.9cm

Illustartion to "Eben Holden"
from "CAMERA WORK, No.9"
1905
Photogravure
19.6×13.9cm

Guido Rey

グイド・レイ Guido Rey (1861-1935)
イタリアの写真家であるグイド・レイは、17世紀のオランダ画家、ヤン・フェルメールの画風に触発した物語なイメージを描き出し、モデルの衣装や室内の様子など、当時の都風俗を見事に再現した絵画のような作品を制作した。こうしたオランダ絵画の復古調的作風は、同時代の写真家ヴィヴィアン・ボラックにも共通している。作家はこの他にもコスチュームを纏ったモデルたちに大胆な身振りをさせ、寸劇の一幕を思わせる様々な情景を描き出している。(K. J.)

フランドル様式の室内
「カメラ・ワーク」24号（1908年）より
フォトグラヴュール
21.2×15.5cm

A Flemish Interior
from "CAMERA WORK, No.24"
1908
Photogravure
21.2×15.5cm

David Octavius Hill & Robert Adamson

デヴィッド・オクタヴィアス・ヒル＆ロバート・アダムソン
David Octavius Hill (1802-1870) & Robert Adamson (1821-1848)
「鳥籠」は絵画生活の象徴とされている。2人の少女は、自分たちの付属を鳥籠を前にして語り合っているのだろうか、そこには幸福への予感があるとともに、束縛への不安もあるに違いないとラファエル前派の影響が感じられる。ヒルによって創り出されたこの美景には、そんな象徴性と物語性が隠されているようにも思えてならない。それぞれの一瞬を思わせる様々な情景を描き出している。(K. J.)

鳥籠
「カメラ・ワーク」28号（1909年）より
フォトグラヴュール
20.7×16.0cm

The Bird Cage
from "CAMERA WORK, No.28"
1909
Photogravure
20.7×16.0cm

Emile Joachim Constant Puyo

エミーユ・ヨアキム・コンスタン・ピュヨー
Emile Joachim Constant Puyo (1857-1933)
ヨーロッパ絵画の伝統においては、長い間女性のヌードをそのものとして描き出すことは許されなかった。それゆえ画家たちは、神話や聖書、歴史物語の一場面を設定し、その中にひそめる様にして肉体のエロティシズムを表現してきた。19世紀後半から20世紀初頭に盛んであった写真の絵画主義を代表するピュヨーのこの作品も共通の回路を持っている。モデルは明らかに神話のニンフを思わせるコスチュームを身に纏い、ポーズをとっている。(K. K.)

習作、練習
ゴム印画
1924年
24.1×30.2cm

Etude, Le Nu
Gum-bichromate print
1924
24.1×30.2cm

風景
ゴム印画
1924年
23.8×31.4cm

Paysage
Gum-bichromate print
1924
23.8×31.4cm

Cindy Sherman

シンディ・シャーマン Cindy Sherman (1954-)
『無題作品 222』Untitled Film Still, 222, 1978
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1978年 20×25cm
『無題作品 219』Untitled Film Still, 219, 1978
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1978年 20×25cm

Cecil Beaton

セシル・ビートン Cecil Beaton (1904-1980)
ヴィクトリア朝1900年代末期の貴族的な雰囲気の人間関係を題にとった舞台装置である。ビートンは、コーコラン、ロバスコの双方を撮影用にしたスタジオを開設し、舞台装置を設計した。彼は、ヴィクトリア女王時代の写真家ジャイルズ・ピル（1826-1901）の作風を意識した。「ヴィーナスの誕生」を中心に、ヴィクトリア朝の雰囲気を醸し出している。
Lady Windermere's Fan
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1946年 20.3×19.3cm

Kikuji Kawada

川田喜久治 Kikuji Kawada (1933-)
『ルポ・ヒロシマ』Hiroshima Report
『ルポ・ヒロシマ』Hiroshima Report
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1961年 46×29.5cm

Kiss de Boulevard, G.D.
『ルポ・ヒロシマ』Hiroshima Report
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1961年 46×29.5cm

Jindrich Styrsky

ジンドリヒ・シュテルスキー Jindrich Styrsky (1899-1942)
シュルレアリスムの画家兼詩人。無意識の「イメージ」を優先して、詩人ヴィチェスラフ・ヴィンチェルとともに、自動的に詩を書くことを試みた。「物語の世界」は、絵画的に世界を切り取り、物語の一場面を思わせる舞台。
On the Needle of Three Days
ゼラチン・シルバー・プリント Gelatin silver print 1940年 8×9.5cm

On the Needle of Three Days
Gelatin silver print
1940
8×9.5cm